

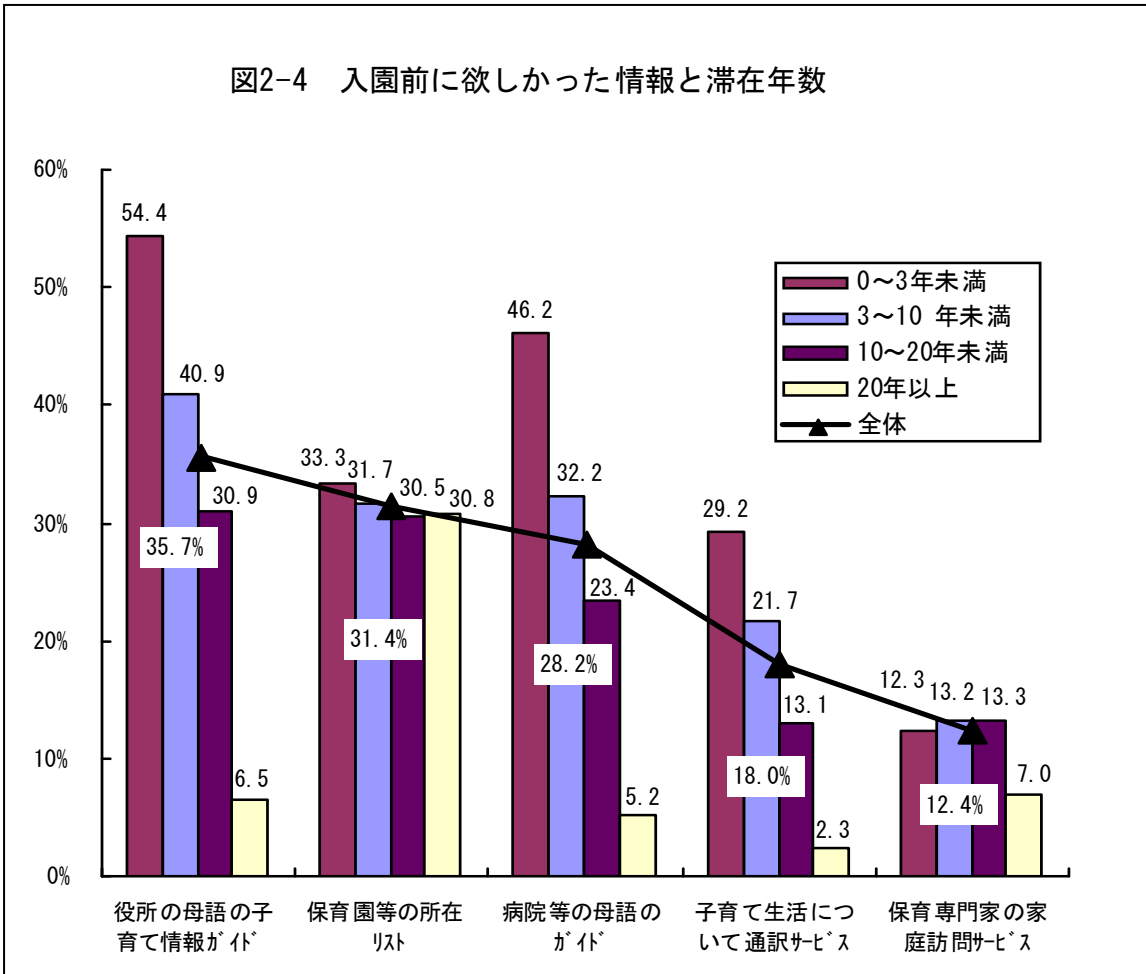
第 1 章

Topics

Topic 1

役所から母語による情報ガイドが欲しい 園の多文化保育・教育の方針が知りたい

図2-4 入園前に欲しかった情報と滞在年数



N=1842

滞在年数と入園前に欲しかった情報

全体として、最も多く望んでいることは、「区役所からの子育てに関する母語による情報ガイド」35.7%で、ついで、「地域の保育園・幼稚園・小学校などの所在リスト」31.4%、「地域の病院・保健所や健康診断に関する母語によるガイドブック」28.2%であった。また、「役所による母語情報」は滞在年数が短いほど多く必要としているが、10年～20年滞在でも、30.9%の保護者が望んでいる。同様に、「病院などの母語ガイド」「子育て通訳サービス」など、母語による情報は滞在年数を経るとともに低下するが、引き続き望んでいることが表れていた。

園の内容が知りたい（詳細は p24 へ）

さらに、「保育園でどんな内容のことをするのかわからない」と記述した保護者が多く、「事前に1日入園など体験できたらよい」と望んでいた。

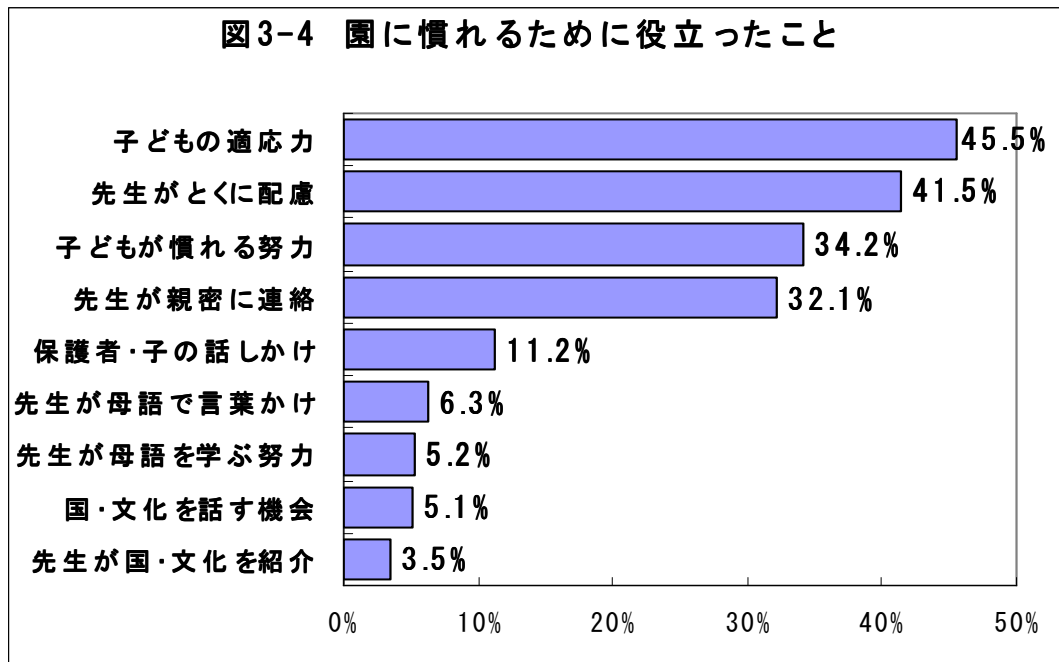
「保育園では何をするのか、何に気をつければよいのかなどの情報が欲しい」の声があれば、「教育理念や保育スケジュールなどインターネットで流してはどうでしょうか」と提案する保護者もいた。

さらに、「ポルトガル語の説明書が欲しい」、また、「特に外国人に対しての保育方針や教育方針が知りたい」などの要求には、今後望ましい対応が必要とされよう。

Topic 2

園への慣れと先生の配慮もたいせつ 母語や文化を尊重する姿勢が伝わる

図3-4 園に慣れるために役立ったこと



N=1956

園に慣れるのに役立ったこと(詳細 p30)

保護者は子どもが一日も早く園に慣れ親しみ、他の子どもと仲良く遊べるようになることを願っている。そのために、園および周囲の人々はどのように接し、子どもの慣れを促したらよいのだろうか。

園に慣れるために役立ったこととして、「子ども自身の適応力」45.5%や「子どもが慣れる努力」34.2%をあげていた。また、「先生が子どもにとくに配慮」41.5%や「先生が親に親密に連絡」32.1%など、先生の子もおよび保護者への心遣いが園に慣れるには大切なこととしてあげていた。さらに、「日本人の周りの保護者や園児たちの話かけ」も重要な要素となっていた。「先生がとくに配慮」は、子どもの年齢に関わらずどの親も答えていたことから、園の心遣いが保護者に伝わり、子どもの園への慣れを促したことを示したものと考えられる。

滞在年数と園に慣れるのに役立ったこと

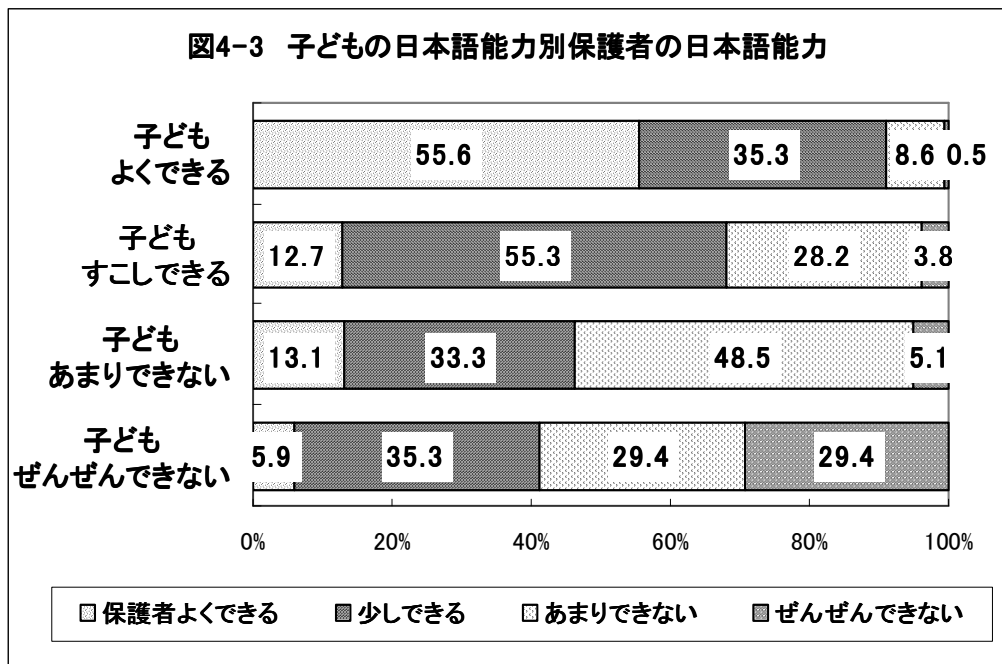
「先生が母語を学ぶ努力」、「母語で子どもに語りかけた」、「先生が母文化紹介の機会を作る」や「先生が母文化を話してくれた」など、「母文化への理解」を示す園も少なからず見うけられた。これは、子どもに母文化への誇りを持たせる意味でも大切なことであり、さらに、保護者の園への信頼感を高めることにもつながっていた。

「子どもが慣れるように保護者が努力」は20年未満に多く、外国生活という緊張した生活の中で、努力する保護者の様子がうかがわれる。「先生が保護者の母語を学ぶ努力」も滞在年数の短い保護者が多くあげている。日本語が比較的不得手な保護者との会話には母語を学ぶことは必須であったと考えられる。母国の文化を尊重する園の姿勢は滞在年数の短い保護者にとって、信頼感を与え園への帰属意識を増す結果になったと思われる。

Topic 3

子どもは親より早く日本語を習得

親とのコミュニケーション・ギャップも



N=1588

子どもの日本語能力と

保護者の日本語能力の関連（詳細は p48）

保護者からみた2歳以上の子どもの日本語能力については、「よくできる」60.7%、「少しできる」26.3%で、6割の子どもは、日本語が「よくできる」と評価されていた。

「よくできる」の中には、その年齢の子どもとしてという意味が含まれていたとしても、日本語ができる子どもの率は高い。

子どもの日本語が「よくできる」場合、保護者の日本語が「よくできる」は55.6%と多かったが、「あまり+ぜんぜんできない」も9.4%いた。子どもの方が保護者より早く日本語ができるようになっているのがうかがえた。

「主人と私の日本語能力が高くなって、子どもの程度の方が高い。だから子どもと親の感情がますます遠く離れていきます」(ベトナム)など、子どもが日本語を習得するにしたがい、日本語の不得手な保護者との新たな不安も生じている。

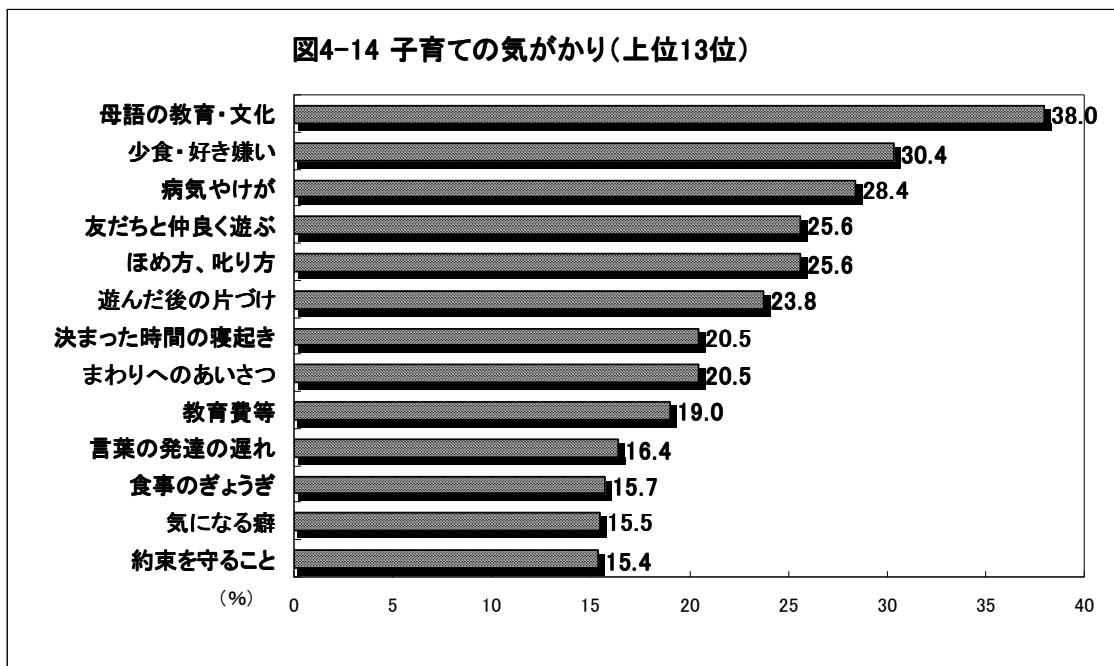
家庭での使用言語と子どもの日本語

日本語を使用している家庭の中には、日本語のみの場合、あるいは、母語と日本語など複数言語を使用している場合がある。

「子どもは、今2種類の言葉を同時に学び、言葉の障害がおきないでしょうか」(保4男・母33歳・中国・1年)

このように、両親の母語と日本語などの2～4言語で育てている子どもに対して、言語が混乱しないかと心配している親もいる。言語は各人のアイデンティティに関わっているので、積極的に家庭では母語を使用している保護者は多い。子育ての気がかりの項でも記すが、各家庭で多様な対応がみられる。家庭で日本語を使用していない子どもの日本語能力に関しても、「よくできる」47.0%、「少しできる」40.3%と日本語ができる子どもが多かったが、それは、今回の調査が通園している子どもが多く、園での日本語使用と関係していると思われる。

Topic 4 「母語の教育・文化」と「食生活」が悩み 「病気やけが」での病時保育も気がかり



N=2002

子育ての気がかり (詳細は p58)

複数回答で子育てを中心にした気がかりやしつけ・教育についての悩みをたずねた。

第1位には、「母語の教育や文化を学ばせること」38.0%、2位「少食や食べ物の好き嫌い」30.4%、3位「病気やけが」28.4%、4位「友だちと仲良く遊べること」25.6%、同じく4位「子どものほめ方、叱り方」25.6%があげられていた。以下「遊んだ後の片づけ」23.8%、「決まった時間に起きたり寝たりする」20.5%、「まわりへのあいさつ」20.5%、「教育費等」19.0%「言葉の発達が遅れている」16.4%の順であった。

気がかりの男女差を全体でみると、「遊んだ後の片づけ」、「気になる癖」は女子に、「言葉の発達の遅れ」は男子に多かった。

0歳児の「病気やけが」、「予防接種・健康診断」、1歳児の「友達と仲良く遊ぶ」、「教育費など」は男子に多く、女子では2歳児以降の「遊んだ後の片づけ」と、6歳児での「まわりへのあいさつ」が多かった。

年齢別子育ての気がかり (詳細は p59)

どの年齢においても「母語の教育・文化を学ばせること」は1・2位を占めていた。「病気やけが」は、年齢が低いほど上位となっていた。「少食・好き嫌い」は1歳以降、常に上位であった。

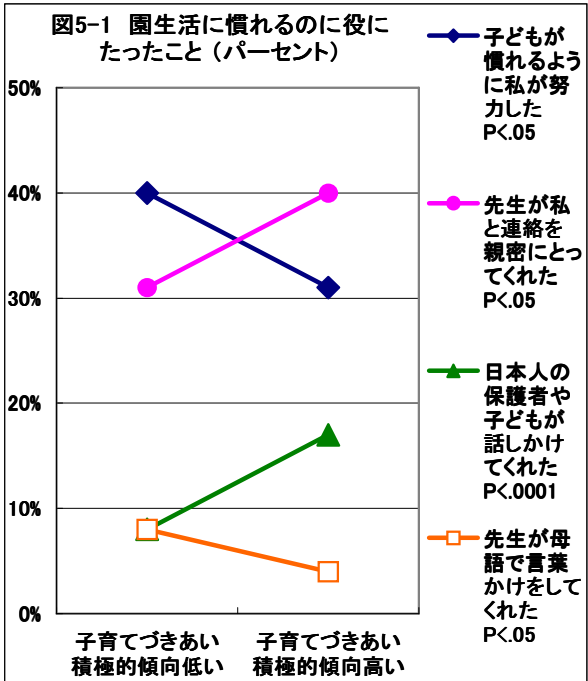
0歳児では、1位「病気やけが」で、3位「予防接種・健康診断」と5位に「アレルギー」が上位にあることが特徴的であった。

1歳児では、3位に「少食・食べ物の好き嫌い」、5位に「言葉の発達の遅れ」があがっていた。この年齢以降「少食・偏食」は、保護者の気がかりの上位を占めていた。

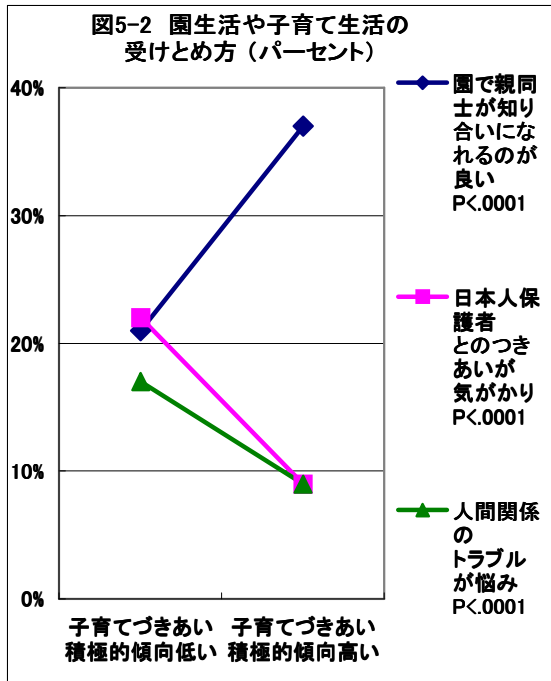
2歳児では、5位に「友達と仲良く遊ぶ」、6位に「排泄とその後始末」があがっており、3歳児では、「少食・偏食」が1位であった。4歳児以降では「母語の教育・文化」が1位となっており、5歳児になると、2位に「遊んだ後の片づけ」があがってくる。6歳児になると、2位に「決まった時間の寝起き」があがっていた。

Topic 5

子育てづきあい消極的傾向な母親へは 園の先生や周囲からの働きかけが必要



N=828



N=828

子育てづきあい積極的・親和性傾向

日本で生まれ育ち、言葉には不自由をしていない日本人の母親であっても、母親同士の子育てづきあいに消極的で、負担感を抱えている人が少なくない現状である。

子育てづきあいには、国籍を問わず、個人のパーソナリティ、子育て意識や行動特性が大きく関与しているのではと思われる。

そこで、「他の親達と話しているところに気軽に参加できるほうだ」、「親子での友だちづきあいを負担に感じる」、「知らない人でもすぐに親しくなれる」など、子育てづきあいへの意識や親和性、行動傾向に関する設問6項目を4段階の評定でたずねた。

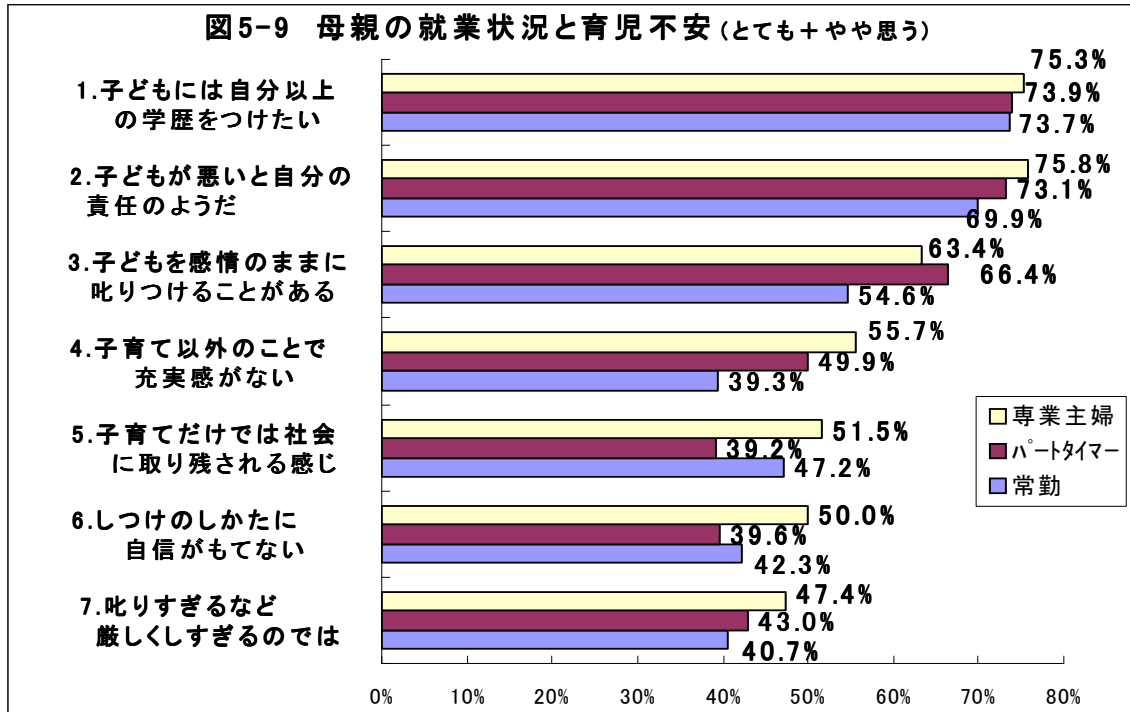
それらの項目を得点化して加算した結果を、『子育てづきあい積極的・親和性傾向』と名づけ、その合計得点が高いグループと低いグループに同じ比率で分けた。

積極的傾向と子育て生活 (詳細は p72 へ)

積極的傾向が高い母親達は、「先生が私に親密に連絡を」、「日本人の保護者や子どもが話しかけた」とまわりの人達の働きかけを評価していたが、積極的傾向が低い(消極的傾向の)母親達は、「自分が努力した」と受けとめているほうが多かった。さらに、消極的傾向の母親は、「先生が母語で言葉かけをしてくれた」ことが、役に立ったと感じているので、園の先生のほうからの働きかけのし方や配慮が必要とされていることが示唆された。積極的傾向の母親は自分から先生へと努めて話しかけ、行事や保護者会にも参加するなど意欲的である。しかし、積極的傾向が低い母親は、その反対に、日本人保護者とのつき合いや参加行事が多いことを負担に感じて、人間関係のトラブルも抱えて悩んでいる深刻な状況下にあった。

Topic 6

社会からの疎外感がある専業主婦 働く母親は家庭と仕事での疲労感



N=1457

母親達の子育て生活の受けとめ方

日本での子育て生活の受けとめ方、そして、子どもに対してどのように感じているのかを18項目にわたって、「とてもそう思う」から「ぜんぜんそう思わない」までの4段階の評定でたずねた。

母親全体では、「子どもには自分以上の学歴をつけたい」を「とてもそう思う」と「ややそう思う」と回答した人が74.3%おり、もっとも多かった。

ついで、「子どもが悪いと自分の責任のように思える」は72.9%で、「子どもを感情のままに叱りつけることがある」は61.5%の順であった。

なお、日本人の母親への同じ設問の結果はp112に、中国に住む中国人の母親との国際比較結果はp80を合わせてご覧いただきたい。

就業状況と育児不安(詳細はp78へ)

子育て生活の受けとめ方を、育児不安の視点から見ると、しつけ・教育に関する責任と不安感や現状不満感が高かった。そして、「ほめる育児」ができずに、つい叱ってしまう毎日の育児への自責の念にかられていた。

就業状況別にみると、「子どもへの学歴期待」には差がなく、全体的には、専業主婦が、どの内容に関しても不安感が高いことが表れていた。

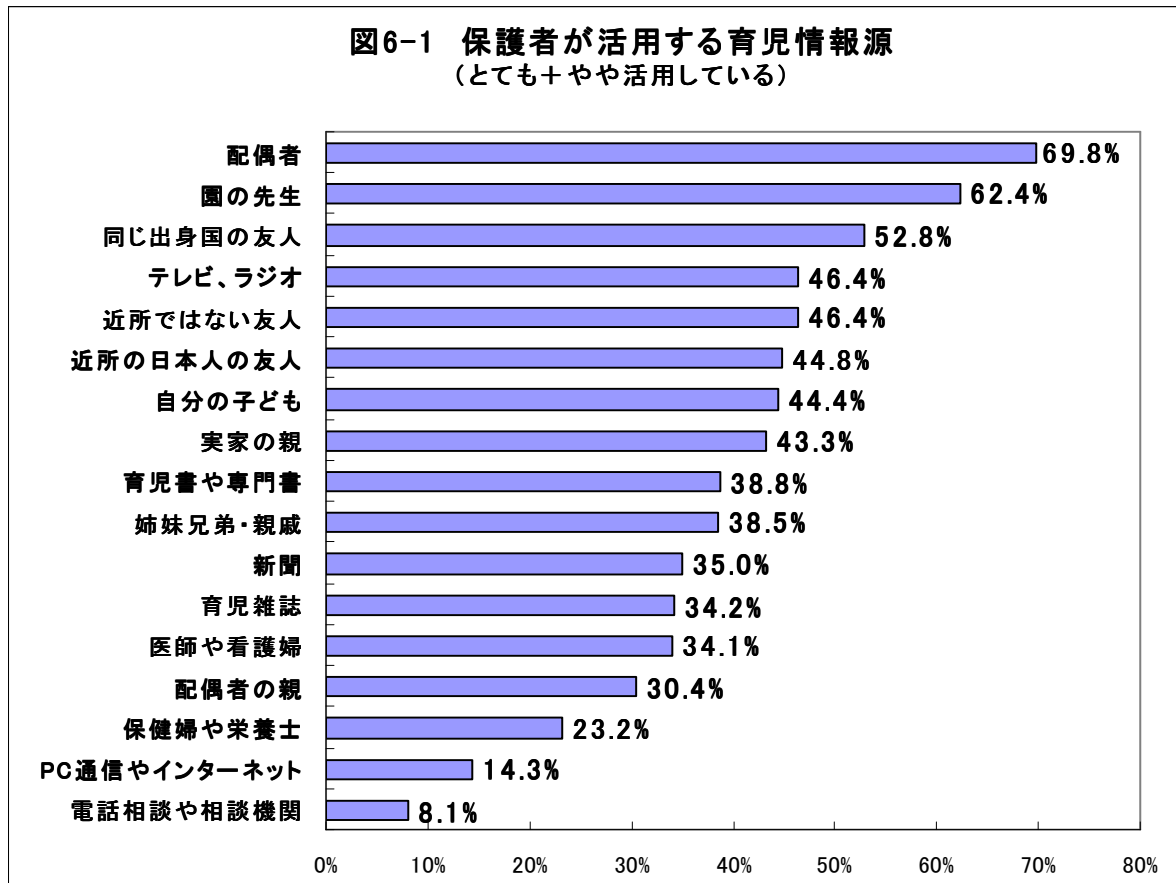
また、パートタイマーは、「子どもを感情のままに叱りつける」が、他の母親に比べて有意に多かった。

また、働く母親の自由記述には、「仕事と育児や家事で毎日が疲れ果てて余裕がなく、子どもにも、つい感情的になってしまい反省している」という類似した内容が目立った。

Topic 7

配偶者・園の先生・同郷者が上位3位

育児情報源として14.3%がネットを活用



N=2002

保護者の活用情報源（詳細は p82 へ）

保護者が活用する情報源の1位は、「配偶者」69.8%であった。ついで、「園の先生」62.4%、「同じ出身国の友人」52.8%が上位3位であった。

「配偶者」や子どもを預けている「園の先生」を、身近な相談相手としながら、「同じ出身国の友人」、職場や学生時代、日本語学校、同じ宗教やサークルの「近所ではない友人」や最新情報が得られる「テレビ、ラジオ」も活用している様子が表れていた。

在日2世・3世も含む20年以上の滞在者が10.9%、日本語がよくできる人が38.3%いることもあり、「近所の日本人の友人」を44.8%が活用している現状であった。

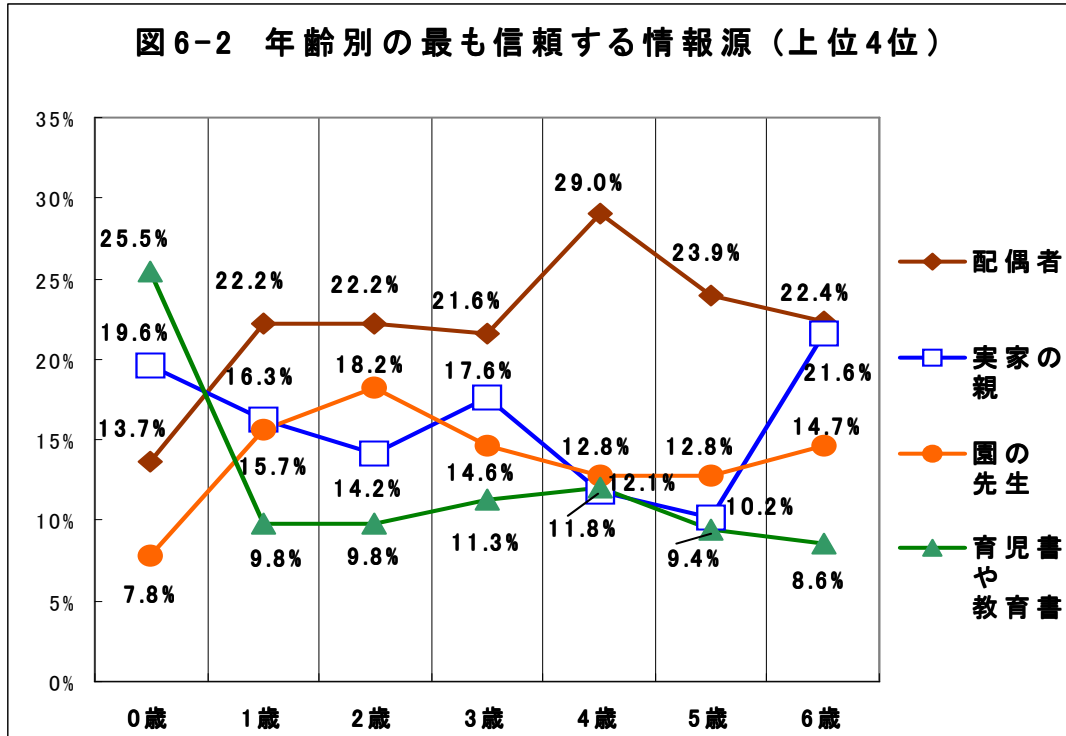
国籍・地域別の活用情報源

活用情報源を国籍・地域別に分類すると、いくつかの特色がみられた。回答者人数に開きがあるので、一つの傾向であるが、活用情報源としての「配偶者」を、「アメリカ」人は全員があげていた。つぎに、「園の先生」は、「朝鮮」が87.2%で最も多く、「台湾」、「日本」、「中国」の順であった。日本の「テレビ・ラジオ」や「新聞」メディアの活用はもとより、在日の家族に向けた韓国語や中国語の新聞、電波メディアも定着している現状も考慮したい。同様に、台湾人が30.6%、アメリカ人27.6%活用の「インターネット」も中国語・英語のサイトからの情報を得ている可能性も高いと思われる。

Topic 8

育児書や実家の親は0歳児の信頼情報源 夫と園の先生が身近な情報支援者

図6-2 年齢別の最も信頼する情報源（上位4位）



N=1509

年齢別最も信頼する情報源（詳細は p85 へ）

本調査の回答者である保護者のうち、83.2%が母親であった。ここでは、母親達が最も信頼する情報源の上位4つを子どもの年齢別にみた。

「育児書・教育書」は、とくに、0歳児を抱える親が頼りにしていた。

4歳児の親の滞在年数は0～3年未満が他の年齢の親より多く、子どもの日本語能力も他より有意に低いこともあり、「配偶者」への信頼関係が群を抜き上昇していた。

働く母親の高い信頼情報源である「園の先生」は2歳児の言語発達の時期には、母語と日本語の問題などがあるためか上昇していた。

「実家の親」は、子どもの成長の節目には上昇しており、実家の親はどこにいても心の拠り所になっていること示していた。

信頼する育児情報源の自由記述から

配偶者：「両親や兄弟と離れて住んでいるので、子どもについては主人と一番多く話し合い、お互いが話し相手になっている」

（保4男・母39歳・韓国・3ヵ月）

実家の親：「ペルーにいても母とは、ときどき手紙と電話で連絡をとっています」（保3男・母33歳・ペルー・11年）

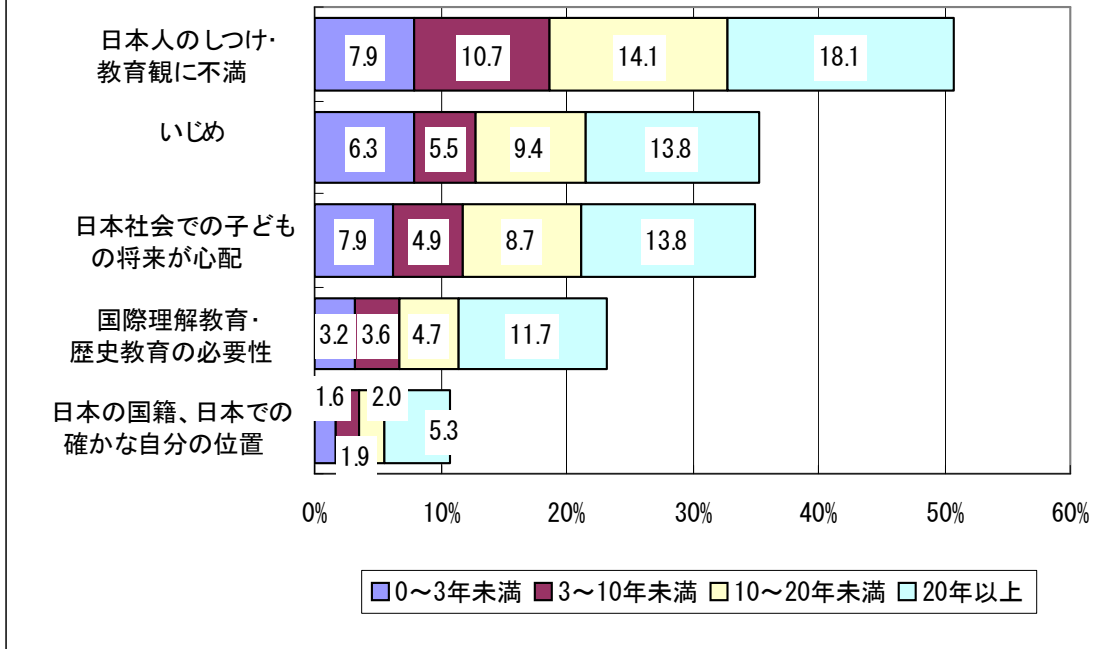
園の先生：「保育園の先生が、子どもの一日の様子を書いてくれたノートを読んで情報を得ます。一番信頼できるし、保育園の先生に感謝しています」（保2男・父39歳・韓国・4年）

育児書：「幼児教育や育児についての専門書。ブラジル人が書いた本は、同じ文化なので、安心して信頼できる」（保3男・母35歳・ブラジル・9年）

Topic 9

滞在年数が増えると、しつけ・教育観に不満 いじめ、子どもの将来への不安が増加

図7-5 自由記述意見と滞在年数 増すごとに増える内容)



自由記述内容の滞在年数による量的変化 (詳細は p95 へ)

本報告書の第2章から第7章までに述べられるように、保護者の園生活での気付きや、子育て生活の気付き、育児不安、育児情報ネットワークは、滞在年数によって内容が変化している。

自由記述に書かれている内容も、滞在年数による特徴があるものと予想できる。

そこで、滞在年数が長くなるほど増えるものと減るもの、また、第4章で結果が出されたように滞在3～10年未満の滞在が一段落して、改めて浮上してくる問題の3つの枠で上位にあげられるものを中心に分類した。

1. 滞在年数が長くなるほど 記述量が増える内容

- 日本人のしつけ、教育観に不満
- 日本社会での子どもの将来が心配

- 国際理解教育、歴史教育の必要性
- いじめ
- 日本の国籍、日本での確かな自分の位置

2. 滞在年数が長くなるほど 記述量が減るもの

- 子育て情報が欲しい
- 忙しくて子どもに手をかけられない
- 日本人の親達との交流
- 自分の日本語能力の不安
- 子どもの日本語能力を向上させたい
- もっと外国人を理解して欲しい

3. 滞在年数が3～10年未満で増え、 その後減少するもの

- 教育、保育態度システムに不満
- 母語と民族の文化を理解させたい
- 日本の保育、保健、医療現場は良い